

いたあの男だ。

源十郎の頭上には青い九月の空があった。ぐっしり汗をかいた体を起こすと、静かな水面がそこにあった。彼はしばらく悪夢を忘れるようにその水面をながめた。

「おろかなことを……」

彼の口からぼつりと、はき出すようなひとりごとが出た。

じっと水面を見る彼の目が、やがて力強く光りはじめた。

彼はすつくと立ち上がった。そして、きたない物をとりはらうように鎧をはずしはじめた。鎧

も、刀も、武士であることをしめすいっさいのものを体から取ってしまうと、ひもでからげた。

それから、一瞬、動きを止めたが、思いきるようにそれを淵の中にはうりこんだ。馬の背から鞍

もはずした。家紋のついた鞍は彼の手からはなれると、青い水の輪の中に沈んでいった。

源十郎は馬のたづなをとると、しっかりした足どりで山をおりていった。

弥勒山のふもと、甘原の名荷洞に、いつのころからか住みついた人がいて、その人の名は山田源十郎と呼ばれたと、今も語り伝えられている。そして、山あいには鞍が淵という深い淵があって、いつも水のたえることがなく、日照りの続く年には、甘原の人たちがそこで雨ごいをしたという。

宮坂 久仁夫

ろくろひき



ろくろひき

「姉、はよこうと。」

学校が終わるか終わらぬうちに、きまって教室の外から弟がよびにきよった。

きょうもまた、ろくろひきやな。子守りのほうがええけどなあと思ひながら、それでもだまつて、わしんたあはもろへ走つていくのやつた。

今では、子守りをしながら遊ぶ子どもは見かけんけど、五十年前には、どこの子どもも、きつと弟や妹を負ふつては、石けりやあやとりをしたもんよ。ところが、わしんたあのようなかま焼きの子どもはな、日曜日や放課後はもちろん、朝も子鈴が鳴るまでもろの手伝いをしたもんやつた。

酒やしょうゆの入れ物にするとつくりをつくるのが、そのころの高田のかま焼きの仕事やつた。一升までのとつくりは、ろくろ師が自分でもろろを回してつくりなれるけど、二升、三升、五升どつくりは、ほかのもんがろくろを回すのを手伝ひにやらなんだ。それがわしんたあ姉弟の仕事になつとつた。

「八重、ろくろを手伝えよ。」

「おとつあま、だれのろくろやな。」

「二升の藤吾さやぞ、眠るなよ。」

おとつあまはそう言うのと、さつさと土ねりの方へ行つてしまひなれるので、わしんたあはウメ干しか、らつきよでもなめていねむりをせんようにしなあかんと思ひながら、もろへはいつたもんよ。

学用品のふろしき包みをたなに置き、かすりの着物に前かけをぎゅつとしてみ、げんろく袖にたすきをかけると、手伝ひのはじまり。

「八重さ、ええかな。」

「へっ。」

四座にすわり、ろくろまわしをしっかりとぎって回し出すと、とつくりづくりが始まる。

二升どつくり用の土の塊りを藤吾さは、ベタンとろくろの上にのせ、手水をして土のふちをつまみ、ぐいぐいとひき上げていくと、まわりからひゆるひゆると土はのびて、とつくりの胴がでる。とつくりの肩の高さまでくると、ひと息して木のこてをちよいと水につけ、底におしつけて中底をつくり、それから、水をつけた両手で包むようにつばめると土はすうつと細長くなってとつくりのくびができる。そのくびのふちを外へ折りまげると口ができる。

藤吾さの肩がはつとするように見える。藤吾さが、ろくろの上でくるくるまわつとるとつくりをちよつとながめ、しつぱきで底を切りなれると、とつくりが一つ生まれるわけよ。

ろくろひきは、ひと休みする間もなく、ろくろまわしにすれる袖をたすきにはさんで、次のとつくりのろくろを回すのやった。

はかりもすも使わず、ただ長年のかんで土の塊りをつくり、両手であやつるだけで三合、五合、一升、二升、三升、五升のとつくりができていく。

いくつつくっても同じようにできるもんやなあと思ひしたり、おじさんたちの手にかかる土が生きてくるなあと思った。

わしんだあだつて男やつたら、ほかのもんいろくろをまわさせて、大きいとつくりをつくりたいなあと思つて、ろくろまわしを動かいたもんよ。

ろくろひきと一口にいつても、ええかげんにろくろをまわせばいいというものではなく、ろくろ師の手もとをじつと見ながら、土の塊りから胴をひきあげるときは力を入れてはよう、口をつくるときはゆつくりと、できぐあいにあわせて回さにやらん。一年じゅうひんやりしているもろの中でも、汗だくやった。

はじめの三つ四つのうちは気持ちもしゃんとしとるでしつかり回せるけど、十、十五となつてくると、同じことのくり返しにたいくつになるし、くたびれるのとでねむたあなつた。

ことに、藤吾さはただだまつてつくる人やつたので、ついいねむりをして、回し方にむらができるし、だんだん回りがにぶなるので、

「はい、八重さ。」

と大声のむちにびつくりしたり、時にはおとつあまにせなかをこづかれて、はつとしたもんよ。それに、長い間すわつとつて足がしびれてしまふし、友だちの遊び声を耳にしながらの手伝いはつらいと思つたことが多かつたなあ。

でも、ろくろひきの手伝いはいやなことばかりやなかつた。

なまかわきにしたとつくりの底けずりや、外側をきれいにけずるときはけずり師は、ろくろ師より陽気で、いろんな話を聞かせておくれるので、よろこんで手伝つた。ことに六助は、「話して。」

「話あて、話あて。」

とせがむと、にこにこしながら、それでも手はやすめずにびわ法師の語り口調で、

「みぞおちのおくへいつたらばベンベン。べつびんさんが立つておる。ベンベン。これはたれぞとよく見れば、風もないのにすすきがゆれるベンベン。どうしたことか、なんじゃいな。ありやうやくつねじゃ、きつねのしつぽでありんした。ベンベン。」

と作り話にふしをつけて語つたり、ときには新よめこのうわさや、けんか話などの世間話をしておくれた。

こうして、とつくりは有田の白土でけししょうをして、酒の名や、店の屋号などのしるしをいれ、

山伏と狐



のほりがまで焼いてでき上がり。
わしんたあが手伝ったとつくりは、だれが使いなれるかなあ。雪国で正月をこすのかなあ。寒さにおいて割れんようになあ、と思いながら馬車で駅へ運ばれるとつくりを見送ったもんよ。

近藤一子